

展覧会『影で〜ブロンニスワフ・ピウスツキの足跡をたどって』

会場: ジョルジ市立博物館、2025年12月12日~2026年2月22日

主催: ヴロツワフ・エウゲニウシュ・ゲツパート美術デザイン大学*

『影で』展は、現代美術と人類学的考察、アーカイブ研究を融合させた学際的な展覧会で、ジョルジ市立博物館において、ヴロツワフ美術デザイン大学と共同した、より広範な芸術研究プロジェクトの一環として開催されました。展覧会のキュレーターはアンナ・コウォジェイチクとダニエラ・タゴフスカが務め、舞台美術はマルタ・プウォンカとミエチスワフ・ピログが準備しました。このプロジェクトは当初から、ブロンニスワフ・ピウスツキの遺産と今日のアイヌ文化の表現という課題に対する、歴史的再現ではなく、現代的な考察として構想されました。

ブロンニスワフ・ピウスツキは民族学者・研究者で、アイヌに関する彼の研究は今もなおアイヌ文化の重要な記録として残っています。彼は歌、物語、儀式の記述などを収集し、歴史的に貴重な独自のアーカイブを構築しました。彼の功績は、ポーランドでは長年、十分評価されずにきました。そのため本展は彼の人物像を想起するだけでなく、彼のアーカイブを現代においてどのように読み解き、過去と現代の芸術実践の対話の場としてどのように活用できるかを問う試みでもあります。

プロジェクトの形成にあたって、2022年と24年に行われた北海道白老町のウポポイ・国立アイヌ民族博物館への調査訪問が重要な役割を果たしました。これらの訪問は、チームにアイヌの遺産との直接的な接触をもたらし、制作方法の転換点となりました。プロジェクトの展開には二つの段階がありました。まず研究への衝動の段階、次に方法論と表現言語の検証の段階へと進みました。これらのプロセスは特に重要で、お陰でキュレーターとアーティストは資料の倫理をより深く認識し、異国情緒的な解釈を避けることが出来ました。

『影で』というタイトルは、不可視性、沈黙、そしてアーカイブと現代の経験との間にある知識の翻訳の難しさを示しています。またピウスツキの遺産が長年影に隠れていたこと、そして記録と責任ある表現の間にある、より広範な緊張関係をも示唆しています。展覧会は単純な答えを提供せず、鑑賞者を注意深さ、脆さ、そして内省の空間へと誘います。

現代において、文化・記憶・喪失について、それらを閉じた物語に還元することなく、どのように語ることができるか、問いかけます。

このプロジェクトは「アーカイブに寄り添って」構築されたと言われます。この表現はそのアプローチの核心を突いています。展覧会はアーカイブを静的な事実の集合として扱うのではなく、それを関係性や問いと責任が渦巻く生きた場として捉えます。ここでは、現代美術は装飾ではなく、探求の道具となります。それは「他者」について語るのをやめ、資料や痕跡、記憶とより慎重な関係性を築く方向に焦点を移すのに役立ちます。

ジョルジ市立博物館はアイヌの遺産とピウスツキの文脈に関する独自の資料と専門知識を提供することから、同市が展覧会の会場となりました。

準備段階では、2025年3月6日にヴロツワフ民族学博物館でシンポジウムが開催されました。そこでは、計画されている展覧会の歴史的背景、資料や、言語が紹介され、このプロジェクトが単なる展覧会ではなく、博物館の実践、学術研究と現代美術の間の対話のプラットフォームでもあることが示されました。

この展覧会は、北海道のポーランド人コミュニティに特別な意味をもたらします。それは北海道の文化史と深く結びついたポーランドの人物を想起させると同時に、その結びつきには謙虚さ、責任、そして対話が必要であることを示しているからです。『影で〜ブロンニスワフ・ピウスツキの足跡をたどって』展は、このテーマを記念碑化するのではなく、むしろ思慮深い出会いの場、そして記憶・アーカイブ・文化遺産をより倫理的に扱う場を開いたのです。

(ダニエラ・タゴフスカ Daniela Tagowska, ass. tutor, Eugeniusz Geppert Academy of Art and Design in Wrocław, 安藤厚訳)

写真 ① (Bear) Maria Bitka, The sending-off, performance, fot. Grzegorz Gajos ② Exhibition view, fot. Michał Pietrzak ③ Magda Grzybowska, Kamil Moskowczenko, the artworks, fot. Michał Pietrzak



アイヌに関する彼の研究は今もなおアイヌ文化の重要な記録として残っています。彼は歌、物語、儀式の記述な

